

ブラームスの「ピアノ五重奏曲」、1楽章の再現部の辺り、和気藹々の穏やかモードから様相が変化。ヴィオラの口火でスイッチオン、静観モードから物申すスタンスへ、個々人のパーソナリティの発揮、作曲家への思いと演奏技術の誇示プレゼン、受動合わせでなくアクティブ働き掛け。自分出番アピール持ち番、他人のパフォーマンスに負けじ劣らじと、皆が皆自己の思いをサアドウダ、率なくこなすは戦力外に埋没しそう。

全員で一つの楽器を表わすのではなく、いい意味でのケンカ腰のバトル内臓、ハラハラドキドキの肌触り、刺激的タッチの面白み。山あり谷ありのドラマチックさ、作曲家を代弁して我も我も、お終いまで丁々発止のチャンバラに終始、熱気充満の汗まみれ。

この作品について生では初めて、楽器の大きさ生かしてピアノがイニシアティブとの先入観、今日の演奏でそれが思い違いと知る。そう、クワルテットが主、それにピアノが加わったモノ、昔のポリーニさんの録音、ピアノを聴く演奏ではありません云々の評があったのを思い出す。ピアニスト、旗振りの立ち位置ではないが、重厚かつ情熱的な音楽を共同で構築、達成感の爽やかさ、喜びにあふれ。(2017.8.15)

---

モーツァルト：アイネクライネ・ナハトムジークト長調 K.525 第1楽章

モーツァルト：ディヴェルティメント ニ長調 K.136>

ブラームス：ピアノ五重奏曲 ヘ短調 Op.34>

(アンコール)

モーツァルト：トルコ行進曲(ピアノソナタ 11番 イ長調 K.331 第3楽章)

モーツァルト：アイネクライネ・ナハトムジークト長調 K.525 第3楽章

---